

小学校英語教育の現状と課題

三浦 省五	松浦 伸和	深澤 清治	林 俊雄
磯部 年晃	内藤 博愛	赤松 猛	伊賀 泰恵
井長 洋	大隈 教臣	五井 千穂	壇 泉
笹原 豊造	原田 良三	久山 慎也	

1. はじめに

2004年3月、当時の河村建夫文部科学大臣の強い要請を受け、中央教育審議会・教育課程部会は外国語専門部会の設置を決定した。必修化の是非も含め、当初は2年かけて小学校における英語教育の調査研究を行う予定であったものが、大臣の強い要望により2004年度中に、必修化に向けた課題の整理、解決策の検討を行うこととなった。専門家の間では、小学校への英語教育の導入に対して賛否両論が依然として渦巻いているが、そうした議論の背後で、時代の趨勢は着実に必修化の方向に向かいつつあるように思われる。

本論文では、小学校英語教育の現状を探るべく、まず導入に至った経緯を整理した後、推進派・慎重派の意見を小学校英語教育のメリット・デメリットの観点からまとめる。その後、限られたデータではあるが本校生徒へのアンケート調査より、小学校での英語の授業が生徒達にどのように影響を与えるのかを探り、最後に、小学校において「外国語（英語）科」が導入された場合のシラバスについて試案を提示する。

2. 小学校への英語教育導入へ向けたこれまでの流れ

一部の先進的な私立小学校は別として、日本の小学校における英語教育は本格的には1990年代初頭より始まったと言える。ここでは、それ以降、現在に至るまでの流れを1) 研究開発校における取り組み、2) 「総合的な学習の時間」における取り組み、3) 構造改革特区における取り組みといった3つの視点から整理する。

2.1. 1992（平成4）年度から始まった研究開発校における取り組み

1992（平成4）年度

鳩山文部大臣（当時）が、研究開発学校制度により、

「国際理解教育の一環としての英語教育を実験的に導入する」ことを表明。大阪の公立小学校2校が「国際理解・英語学習」指導の在り方についての研究開発学校として指定される。

1994（平成6）年度

「小学校における外国語学習の在り方」に関する研究開発校が12校指定される。

1996（平成8）年度

「小学校における外国語学習の在り方」に関する研究開発校が各都道府県に1校ずつ指定される。

2003（平成15）年度

研究開発校の数は67校にまで増加。

研究開発校の数は年を追うごとに着実に増加しているが、実証的データは依然として不足しており、1) 目標の明確化と達成度の評価、2) 評価、3) 小中連携、4) 研究課題の設定のあり方、が開発校における課題として指摘されている（松川 2004a）。

2.2. 2002（平成14）年度から始まった小学校新学習指導要領実施による「総合的な学習の時間」における取り組み

1998（平成10）年度

新小学校学習指導要領告示。2002（平成14）年度から「総合的な学習の時間」において、外国語会話活動の実施が可能になる。

2002（平成14）年7月

文部科学省が「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想—英語力・国語力増進プラン—」を発表

2003（平成15）年3月

文部科学省が「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を発表

「総合的な学習の時間」における外国語会話活動の導入は、あくまで国際理解教育の一環として行われる

Shogo Miura, Nobukazu Matsuura, Seiji Fukazawa, Toshio Hayashi, Toshiaki Isobe, Hiroyoshi Naitou, Takeshi Akamatsu, Yasue Iga, Hiroshi Ichio, Noriomi Ookuma, Chiho Goi, Izumi Dan, Toyozo Sasahara, Ryoza Harada, Shinya Hisayama: Current Situation and Problems in English Classes in Elementary School Education

に過ぎず、取り扱う外国語も必ずしも英語に限定されるものではないが、一般的にはこのことが小学校における英会話の導入として捉えられている。また、「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」においては、この英会話活動に対する支援策として、活動推進のための『手引き』の作成や、担当教員への研修の充実、英語に堪能な人材（ALT、中・高英語教員、民間の人材）の供給が打ち出されている。

2.3. 2003（平成15）年度から始まった構造改革特区における取り組み

小泉内閣が、規制緩和と政策の一環として構造改革特区を認定し、従来の研究開発学校制度とは別に構造改革特別区域研究開発学校設置事業を制度化した。始まったばかりの取り組みで、どのような成果が出るか未知数な点も多いが、自治体が取り組むことで地域一帯の小学校が英語教育に取り組む例も多く、包括的なデータが得られることが期待できる。

3. 小学校への英語教育導入における推進派・慎重派の意見

3.1. 小学校への英語教育導入の背後にある大衆の期待

2004年9月に日本世論調査会によって実施された全国世論調査¹⁾において、小学校の英語必修化に対して「賛成」「どちらかといえば賛成」を合わせると回答者の82%が支持を表明した。賛成理由としては「国際社会では英語が大切（43%）」、「英語教育は早ければ早いほど良いから（38%）」、「英語を通じて国際感覚を身に付けることができるから（14%）」が主なものとしてあげられている。また、ベネッセ未来教育センターが行った「子育て生活基本調査²⁾」によると、小学校で英会話を指導することに対して回答者のうち79%が「希望する」「まあ希望する」と賛成の意を表している。和田（2004）は、こうした小学校の英語教育に対する、一般の人々の圧倒的な支持の裏には「憧憬」と「怨念」の複合体としての心情があると分析し、こうした支持に後押しされる形で現在の必修化に向けた動きが進行していると述べている。

しかし、そうした世論の小学校英語教育に対する素朴な期待とは別に、専門家からはこの段階での英語教育に対して賛否両論が出されており、こうした論争は今後、必修化に向けた流れのなかでさらに激しくなることが予想される。以下、その論点をまとめる。

3.2. 小学校における英語教育導入のデメリット

3.2.1. 母語への影響

一般的な意見として、小学校から英語教育を始めると、母語としての日本語に乱れが生じるという懸念が

あるようである。例えば、上述した全国世論調査の中で、導入に反対する人々の間で一番の理由としてあげられたのは「国語の基本を身に付ける前に英語を学ぶと混乱する（49%）」ことであった。

しかし、こうした不安は漠然としたものであり、日本の小学生がどの程度の英語に晒されると母語である日本語に影響がでるのかに関して実証的な裏付けはない。以下の指摘にもあるように、仮に影響が出るにしても、現状ではそこまでの英語によるインプット量を小学校で確保するのは困難であると予想される。

（皮肉なことですが）現在計画されている程度の英語教育を導入したからといって、こども達の日本語に乱れが生じるとは思えません。ただ...英語教育を導入しなければ、浮いた時間を日本語にであれ、その他の教科にであれ充てることができるのです。

大津・鳥飼（2003：30）

3.2.2. そぎ落とし（unlearning）の問題

大津・鳥飼（2003）ならびに大津（2004）は「総合的な学習の時間」において行われている英会話活動において、児童に正しい英語のモデルを提示したり、授業をデザインする専門性を備えた指導者の不足から、誤った知識や技能が児童に身に付いてしまうことを懸念している。そぎ落とし（unlearning）とは、一度身に付けた誤った知識や技能を捨て去り、新たに正しいものを習得し直すことであるが、これはゼロから習得を始めるよりもはるかに困難なことである。

『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』は、「総合的な学習の時間」における指導者確保の点からその実施回数³⁾の3分の1程度を、外国人教員、英語に堪能な者又は中学校等の英語教員が指導することをその目標として掲げているが、現段階ではこれはかなり高いハードルであると言える。

そぎ落としの問題は、制度面の不備から生じているもので、本質的には小学校における英語教育のデメリットとは関係ないが、現状から考えると児童に悪影響を与えかねないという点で十分懸念されるべき問題である。

3.2.3. 英語優越主義に陥る危険性

大津（2004）によれば、英語優越主義とは、英語が実質的な国際共通語として用いられる現状が、政治的・経済的・軍事的な歴史的背景に起因するのではなく、英語という言語自体、さらには英語を母語とする人々の文化が優れていることに起因するのだとする偏った捉え方である。そこまで極端ではないにしても、「なぜ児童に英語を教えるのか」という根本的な問いに対する答えを不明確にしたまま、小学校への英語教育導入を性急に進めた場合、児童の中にそのような誤

った観念を芽生えさせてしまう危険性があることを、小学校英語教育に携わるものは認識しておかなければならない。

3.3. 導入のメリット

3.3.1. コミュニケーションへの積極性の涵養

直山 (2004) は、母語においてはほぼ無意識的にコミュニケーションを図れる児童たちに、取って英語という未知の言語をかぶせることで不自由な状況を生み出し、相手との協力でその状況を乗り越えることで、意図を伝え合う喜びを味あわせることが、小学校における英語教育の意義であると主張しているが、そうしたコミュニケーションの楽しさを経験させることは、それ以降の英語学習の礎となるコミュニケーションへの関心・意欲・態度を育むという点において肝要である。こうした主張は、以下の金森 (2003) の記述にも読み取ることができる。

母語においてコミュニケーションの楽しさを持つことができない児童が、英語をとおして始めてコミュニケーションの楽しさに出会うことが起こり得るのであれば、英語学習には十分な意義があると言える。...児童間、児童と教師の間にラポールが生まれる授業の雰囲気にはこれまでの中学校、高校における英語教育とはまったく異なる可能性が小学校の英語教室に存在すると感じられる。(金森 2003: 9) 勿論、こうしたコミュニケーションの楽しさや「他人に分かって貰えることの」喜びを経験させることにより、授業の中で生徒の自己肯定感を育成することの重要性は中学校以降の英語教育においても認識されているが(例えば、中嶋 2000)、自分とは異質のものに対する寛容性の高い小学校段階ではこうした側面はさらに強調されるべきであろう。

3.3.2. 音声面における臨界期(敏感期)の影響

第二言語習得における臨界期(敏感期)の影響について、これまでの先行研究を踏まえ、唐須(2004: 88)は「第二言語に関しては、「臨界期」と言われるような絶対的な境界線はないかもしれないが、学習年齢が若いほど達成度が高くなるという漸進的な傾向は存在する」と述べ、その存在を主張している。この第二言語習得における臨界期(敏感期)の影響に関しては、いまだ研究者間で意見が分かれており、相反する実験結果も多数報告されているが、Gass & Selinker (2001) のまとめによれば他の側面はともかくとして少なくとも音声面においては、比較的その存在は認知されつつあるとのことである。

しかしながら、EFL 環境下で英語を学習する日本の小学校の状況と、例えばアメリカへの移民のような ESL 環境下における英語学習を同一視して論じるこ

とには、インプットの量の違いから反論も唱えられており(大津 2004, 富田 2004)、この点は今後の研究によって明らかにされなくてはならない。

4. 小学校英語教育の効果—本校生徒へのアンケート調査をもとに—

本章では、本校の小学6年生の児童と中学1年生の生徒を対象として行った2つのアンケート調査について結果を報告する。

4.1. 調査 I

4.1.1. 調査目的

- 1) 附属小学校第6学年児童は英語学習をどのくらい楽しいと感じているか。
- 2) 附属小学校第6学年児童は英語学習に対してどのくらい有用性を感じているか。

4.1.2. 調査手順

調査時期: 2004年10月

調査対象者: 広島大学附属小学校第6学年児童
(男38名, 女40名)

調査方法: アンケート調査, インタビュー調査, 記述調査

4.1.3. 結果と考察

まず、小学校で行われている英語活動について「とても楽しい」、「楽しい」を合わせると91%の子どもが肯定的な感想をもっていることが分かった(図1参照)。その理由を追跡調査してみると、以下のようないことが主な理由として明らかとなっている。

- ・いろいろな単語を知ることができたから。
- ・外国の人と普通に話すこと(緊張したりせずに)ができたから。
- ・英語で話していると、ちょっと賢くなったように感じるから。
- ・いろんなカードを使ったり、ゲームをしたりするので、楽しいから。

これらの回答から、大部分の児童は、外国人講師との直接的な関わりに、抵抗感なく英語活動をできていることがわかる。また、英語活動をとおして、自分の「賢さ」を感じたり、自己の能力の向上を感じ取ったりしている児童も多いと言える。今後、カリキュラムや指導体制を確立していく際には、上記のような児童の感じる「楽しさ」を大切にしていけることが重要である。

しかし、一方で、英語学習に対して「楽しくない」「全く楽しくない」と回答している子どもが10%いることも、注目に値する。その理由を追跡調査してみると、次のような回答を得た。

- ・ゲームをしたり、みんなで考えたりするのは楽しい

けど、外国人の先生に突然話しかけられると、なんて答えたらいいかわからなくなるから。

- ・自分の話している英語が、本当に正しいのか自信がない。
- ・英単語をなかなか覚えられないから（話すとき、書くとき）。

この回答を見ると、児童が英語学習に対して自信がもてないことについて「楽しさ」を感じられないと考えられる。附属小学校で実施している英語活動は、ALT が中心となって展開するため、その補助にまわる小学校側の教員が、いかにしてパイプ役となっているのか、指導体制のあり方を模索していく必要を感じている。

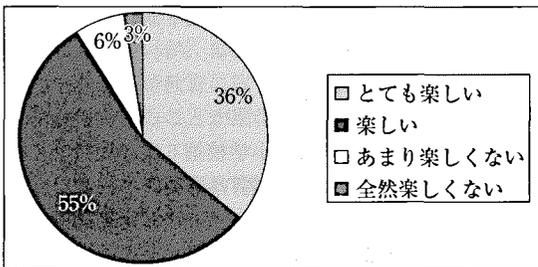


図1 小学校英語活動の楽しさ

次に、小学校英語活動の有用性について生徒の回答を見てみると、78%の児童が、その有用性を認めている（図2参照）。その理由について、さらに詳しく調査するために、自由記述で児童に回答を求めたところ、以下のような感想が上位3つの回答として得られた。

- ①単語をたくさん書けるようになったから、中学校の勉強でも役に立つと思う。
- ②英語を少しだけ話せるようになったから、外国人にも話しかけられると思う。
- ③外国の人が話している言葉もちょうとだけわかるようになったから役に立つと思う。

小学校での英語活動は、「英語を話す、聞く」活動を中心に展開しているが、実際の児童の反応としては、「英語を書けるようになった」ことが有用感を感じて

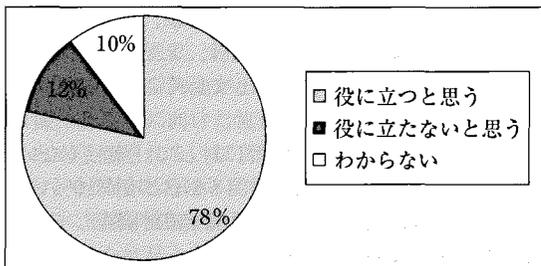


図2 小学校英語活動の有用性

いる一番大きな要因であることは、注目に値する。このことは、児童の中学校英語科の学習に対するイメージに大きく依存しているところではあるが、今後のカリキュラム編成において、児童のニーズも勘案していく必要性を示唆している。

調査Iの結果から言えることは、小学校での英語学習は、児童の知的な高まりを感じさせる学習になり得ていることである。小学校から英語の学習ができることに、児童は大変興味を持って取り組んでいるとともに、楽しさも実感できているといえる。附属小学校では、現在第5学年・第6学年の2学年で英語学習を実施しているが、中学校との関連を考慮して、今後第3学年・第4学年においても同様に英語活動を展開した場合、児童の実態はどのように変容するのか、実験的実践を積み上げていく必要がある。

4.2. 調査II

4.2.1. 調査目的

- 1) 附属中学校1年生は小学校時に英語の授業をどの程度受けてきたのか。
- 2) 授業を受けたことが中学校入学後の英語の授業に何らかの影響を与えているのか。

4.2.2. 調査手順

調査時期：2004年11月

調査対象者：広島大学附属中学校1年生

(男60名、女59名)

調査方法：1) アンケート調査（回答方法については主として4件法を使用した）

2) 本校で9月に実施された学力テスト

4.2.3. 結果と考察

1) 授業の形態について

まず、英語の授業経験についてであるが、本校中学1年生のうち、小学校で英語の授業を受けた経験をもつものは全体の67%であった（図3参照）。中学での入門期指導を考える際、英語の授業を経験したものとそうでないものが混在している現状は、配慮を要する面も多く大変であるが、全小学校で外国語（英語）科

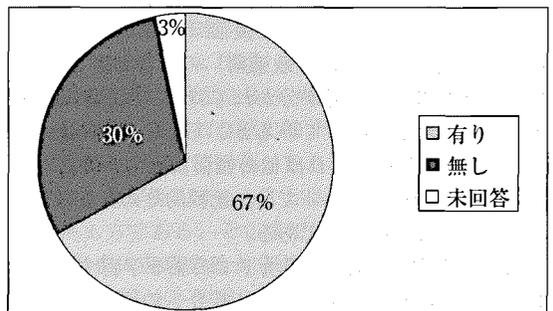


図3 小学校時の英語の授業の有無

が導入されるか、あるいは小学校における英語教育が廃止されない限りこうした状況は継続していくものと思われる。中学校側も各小学校での取り組みの内容を的確に把握し、指導計画に反映させなくてはならない。

次に、小学校時の英語の授業の総時間数について見てみる。算出方法としては（1回の授業の時間×年間の授業回数×授業を受けた年数）といった計算を行っているが、その結果、総時間数20時間未満の生徒が最も多く見られた。これらの生徒は45分授業を1ヶ月に1度、5、6年生時に受けているものが中心である。次に多いのは総時間数50時間程度の生徒であるが、これらは45分授業を週に1度、5、6年生時に受けている生徒達である（図4参照）。

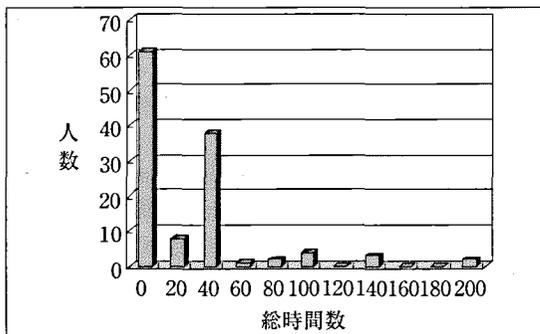


図4 小学校での英語授業の総時間数

最後に、主として誰が授業を担当したかについて調べてみると、外国人指導助手（ALT）が担当したケースが最も多く（79%）、続いてホームルーム担任（HRT）の11%、担任以外の日本人教師（JTE）の10%の順で続いている。ALTの不足が叫ばれている全国的な小学校の状況を考えると、今回の調査でALTの指導を受けた生徒が8割近く上ったことは意外であるが、この背景には本校独自の事情もあると考えられる。つまり、本校では附属小学校からの入学生が多いが、附属小学校においては主としてALTにより授業が行われているため、その割合を押し上げたこ

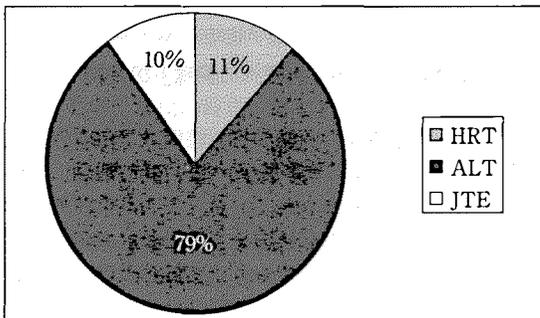


図5 授業担当者

とが影響していると考えられる（図5参照）。

2) 授業に対する生徒の感想

次に、小学校時の英語の授業に対して生徒はどのような感想を持っているかについて、以下のグラフに示した（図6参照）。

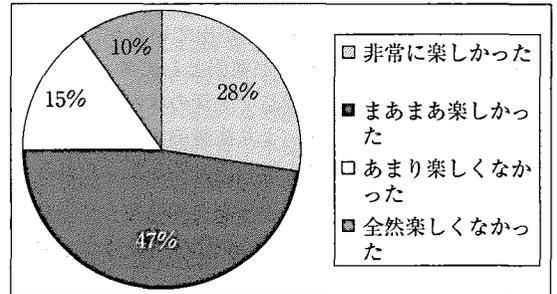


図6 小学校での英語の授業の楽しさ

授業について、「非常に楽しかった」「まあまあ楽しかった」を合わせると75%の生徒が肯定的な感想を持っているが、その一方で否定的な感想を抱いた生徒も25%みられた。「英語嫌いを作らない」ことが小学校英語において最重要課題として挙げられ、研究開発校の取り組みにおいては、英語嫌いが皆無であった実践例も報告されているが、今回の調査により、そうした児童全員に肯定的な感想を持たせるための指導は、言われるほど簡単ではないことも明らかとなった。調査Iの結果もふまえ、具体的な指導法を考えていかななくてはならない。

続いて、生徒が自分の英語力の伸びをどのように認識しているかについて、授業担当者ごとに分析してみる。ALTが担当者の場合、概ね半数以上の生徒が4技能において力がつたと認識している（図7参照）。小学校段階では音声面での指導が中心になされているはずであるが、「読む」「書く」技能についても伸びを認識している生徒が4割いたことは予想外の結果である。今回の調査では詳しい授業内容まで調べてはいないので、こうした伸びをもたらした要因は特定できない

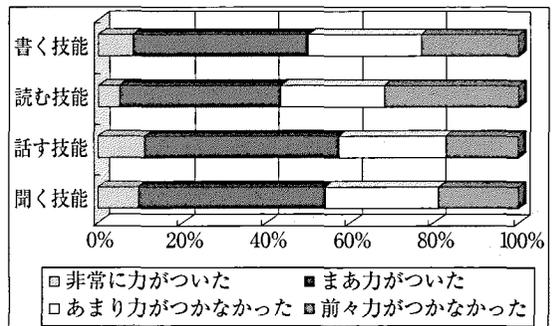


図7 ALT 授業担当時の4技能の伸び

が、更なる調査が必要である。

HRT, JTE が担当者の場合 (図 8, 9 参照), 一般的に生徒の評価としては厳しい傾向がでている。ただし、データの母数が少ないこと、英語の総学習時間数との関連もあるので、この結果を単純に ALT が授業担当である場合の結果と比較することはできない。また、HRT と JTE の間で差が出ているが、これは授業者と生徒との人間関係が要因として考えられる。すなわち、日々の授業を通じて生徒の状況を細かく把握している HRT の方が、より生徒の実態に即した指導を行えることの可能性を示していると考えられる。

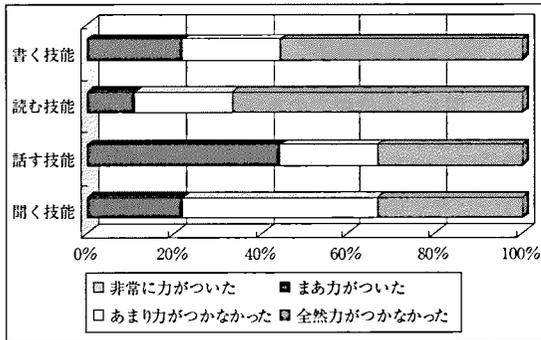


図 8 HRT 授業担当時の 4 技能の伸び

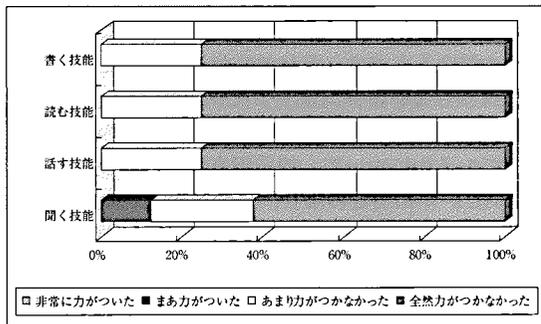


図 9 JTE 授業時の 4 技能の伸び

また、今回は生徒へのアンケート結果を基にしているので、技能の伸びについてはあくまでも生徒自身の主観的な判断によるものである。あわせて熟達度テスト等を行い、実際に技能の伸長を計ることも必要である。

3) 中学校入学後における影響

最後に、小学校での英語の授業が、中学入学後での英語の授業に何らかの影響を与えているかを情意面と学力面から分析してみる。まず、小学校での英語の授業の楽しさと中学校での英語の授業の楽しさについて、相関関係を以下のバブルチャートで示す (図10)。このチャートでは、丸が大きければ大きいほど、その

座標におさまる人数が多いことが示されているが (人数については丸の右横に掲載)、小学校時も中学入学後も英語の授業は「まあまあ楽しい」と回答した生徒の割合が最も多い。比較的チャートの右上の丸が大きくなっていることから、多くの生徒 (図6で示された割合では75%) が小学校時に英語の授業が楽しいと思っており、そうした生徒は中学入学後も英語の授業に対して肯定的な感情を抱いていると言える。

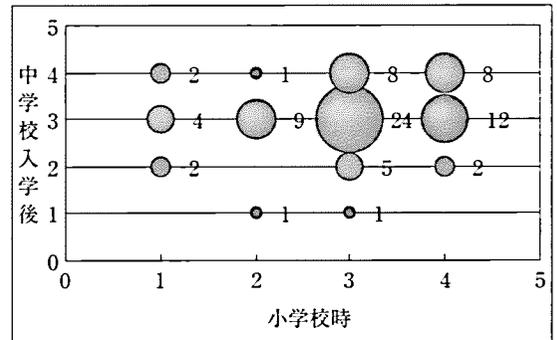


図10 小・中「楽しさ」の相関

次に、外国への興味・関心が小学校時と中学校入学後でどのように変化しているかを、同じくバブルチャートで示す (図11)。チャート中で対角線より左上の丸が大きくなっていることから、小学校時よりも中学入学後の方がアンケートの数値が上がっており、このことから外国への興味・関心が増加していると結論づけられる。

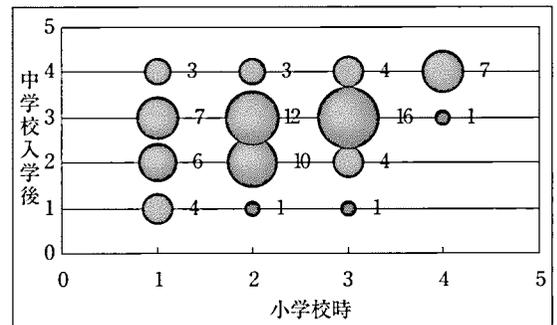


図11 小・中「外国への興味」の相関

最後に、小学校時の英語学習総時間数と中学入学後の英語の成績について相関を調べる。総時間数については学校での授業とあわせて、塾・英会話学校での学習時間についても調査し両方を合計した。中学での英語の成績については本校で9月に実施した実力テストの成績を利用している。両者の関係は次頁の散布図で示してあるが (図12)、この図から判断すると、小学

校時の英語学習総時間数と中学入学後の英語の成績については相関関係があるとは言いがたい ($r=.25$)。生徒の中には小学校時に英語の学習をしなかったことで、4月当初に不安感や劣等感を持つものもあるが、今回の結果から考えると、中学入学後の努力によってそうした学習経験の差は取り返すことが十分可能であると言えるだろう。

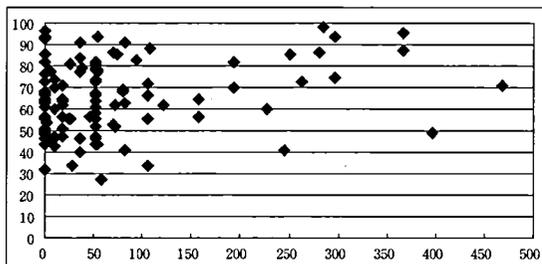


図12 小学校時英語学習時間と中学入学後の成績との相関

5. まとめと今後の課題

5.1. 「国際理解教育の一環としての外国語活動」から「外国語（英語）科」へ

文部科学省の調査によれば、昨年度「総合的な学習の時間」において外国語会話活動を実施した公立小学校の割合は全国で51.1%にのぼり、単純計算するとその数は11,920校となっている。「英語科」としての取り組みを行っている研究開発学校が67校、構造改革特区として認定された取り組みが25件であることと比較すれば、現在、小学校で行われている英語教育はその大部分が「国際理解教育の一環としての外国語会話活動」であるといえる。

先述したように、ここで注意すべきことは、この「国際理解教育の一環としての外国語会話活動」は「英会話」と同義ではないことである。このことは以下の『学習指導要領』の記述からも読み取れる。

第1章「総則」第3「総合的な学習の時間の取り扱い」

3. 各学校においては、2に示すねらいを踏まえ、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。

5. (3)国際理解に関する学習の一環としての外国語活動等を行うときには、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること。

(文部省 1998：3)

この意味において、現段階での小学校英語教育の意義が、英語という言語自体の習得よりも、むしろ児童のコミュニケーションに対する積極性の涵養や自己肯定感の育成(直山 2004)、学級担任同士や地域のボランティアとの連携による授業スタイルの変容(松川 2004b)といった観点から語られていることも頷ける。

しかしこうした研究者・実践家の捉え方とは裏腹に、メディア等の報道を見ると、一般的には「総合的な学習の時間」における外国語会話活動の導入は、小学校における英語教育の本格的な開始と捉えられており、和田(2004)の指摘するように文部科学省が「国益を損なう英会話力不足」とった産業界からの批判に対し、我が国の英語教育改善のために切った「貴重なカード(和田 2004：115)」として位置づけられている。この文部科学省の決定は、現時点で、英語が使えることに対して憧れを抱く一般の人々や、大競争時代を生き残るために語学力を必要とする産業界からの強力な支持を得ており、この支持を背景に今後「国際理解教育の一環としての外国語活動」は「外国語(英語)科」へと姿を変えていくことは十分に予想される。

5.2. 小学校「外国語(英語)科」に求められるもの

教科として小学校での「外国語(英語)科」を想定した場合、中学以降の英語教育との関連から1) 言語や文化に対する理解、2) 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成、3) 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成、といった目標を小学校段階にふさわしい形でどのように取り入れていくかが重要な課題となるが、この点については、東野・高島(2003)で提示された『小学校学習指導要領外国語(英語)科』解説の試案が参考となる。

東野・高島は、小学校での英語教育を実践していくためには、1) 教科としての目標を明確にすること、2) 言葉として英語を捉え、聞いてわかり、使えるようになるための活動を取り入れていくこと、3) 小学校独自の英語教育を進めていくこと、4) 中学校との連携を視野に入れて進めていくこと、の4点が重要であるとの認識のもと、中学校の学習指導要領を基として以下のように教科の目標を提示している。

外国語を通じて、異文化に対する関心を高め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことを通して、実践的コミュニケーション能力の基盤を養う。

(東野・高島 2003：91)

最初にあげた中学校指導要領の3つの目標との関連で考えると、1)については、中学校で扱われる文法事項のような「言語に対する知識」を小学校段階で取り扱う必然性は低いとの主張から「言語」という視点は

外されている。また、現在「総合的な学習の時間」で行われている国際理解教育において、異文化に対する関心を高めるために様々な実践が行われているが、そうした実践で培われた手法は「外国語（英語）科」においても十分活用できると考えられる。

2) については中学校と同様、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成があげてあるが、この点についても「総合的な学習の時間」で行われている優れた実践から得られる知見は大きい。鳥飼(2004)や金森(2003)は、小学校から大学までの英語教育の連携を考えた際、小学校段階ではまずコミュニケーションへの関心・意欲・態度を育むべきであると主張しているが、これは「外国語（英語）科」となっても変わらず強調されるべき目標である。

ただし、今回のアンケート調査から明らかになったように、こうした情意面の指導は言われるほど簡単ではないということは認識しておかなければならない。

目標3)については、英語が教科化された場合にこれまでの取り扱い方と大きく変わってくる部分である。東野・高島の試案では実践的コミュニケーション能力の「基盤」という用語が使用されているが、この「基盤」が指すものについて彼女らは「発音・リズム・イントネーション」といった英語の音声的な特徴をあげている。音声面での指導を考える際に、受容面と発表面の2つの側面が考えられるが、発表面の中でも特に発音指導をどうするかについては、教科として英語の指導を行う際には重要となる。「総合的な学習の時間」の枠内で、児童が英語に慣れ親しむことを主眼とするのなら、児童が産出する英語の発音については最低限通じるレベル(intelligibility)が確保されていれば良いと思われるが、教科として指導を行うとなると発音の正確さ(accuracy)も目標に加えられるだろう。母語の習得とは異なる、限られた時間の中で「英語を話せる口」をどのような明示的な指導を基に作るか、また、児童の産出する英語の発音を誰がどのように評価するか、中学校の入門期の指導を参考としながら考えていかななくてはならない。

また、音声面の指導と平行して、どの時点で文字の導入を行うかも検討を要する課題である。勿論、先述した臨界期(敏感期)を認める立場をとれば、小学校での英語教育を行うメリットを生かすためには、音声を中心とした指導を行うことは当然であるが、さりとて音声のみを媒体として指導を組み立てていくことは、行える言語活動の可能性を制限してしまうという点で得策ではない。

現在、「総合的な学習の時間」で行われている外国語会話活動において、松川(2004b)は単なる英文や

スキットの練習にとどまらない創造的な取り組みが、特に高学年において見られるようになったと指摘している。これらの取り組みにおいて共通しているのは「道具としての英語」の働きを重要視し、教室の外との繋がりの中で英語の使用目的を児童に対して明確にしている点である。こうした実践は、国際理解を中心にすえた「総合的な学習の時間」の特徴を色濃く反映したものであり、その創造性は教科としての英語においても継承されるべき貴重なものであるが、音声のみを媒体としてこれらの活動を組み立てることは困難である。よって、活動の幅を広げるという意味において、文字の導入については、今よりも積極的な検討がなされるべきである。ただしその際には、音声から文字へという自然な言語習得の流れに逆らわないよう配慮し、音声にしっかり慣れた高学年からの指導を検討するべきであろう。

5.3. シラバス試案

ここまでの議論をふまえ、最後に小学校で「外国語（英語）科」が導入された場合のシラバス試案を資料1にて提示する。シラバス作成に当たっては、1) 中学校との連携を視野に入れた指導、2) 文字指導の系統的な訓練、3) 音声の系統的な指導の3点を考慮した。単位時間の構成については1) あいさつ、2) 復習、3) 表現の導入、4) 展開(ゲーム・クイズなど)、5) 音声の訓練、を基本的な流れとしていが、高学年ではこれらに6) 文字の指導、が加わっている。このうち、音声訓練については低学年で語レベルの正確な発音、中学年で文レベルのイントネーション、高学年では音声とともにフォニックスを活用した文字の指導を行うことを想定した。

5.4 まとめ

本論文では、小学校英語教育の実態に迫るべく、導入に至った経緯をまとめ、推進派・慎重派の意見を整理した後、「外国語（英語）科」が小学校において導入された場合を想定して、本校生徒へのアンケート結果も参考としながらシラバスの試案を提示した。今後は作成したシラバスの妥当性を実践に基づいて検証し、その精緻化を図ることが課題となる。

【註】

- 1) 全国250地点から20歳以上の男女3000人を対象として調査を行っている。回収率は60%で、男女比は男性50.5%、女性49.5%となっている。
- 2) 東京都、千葉県、神奈川県の子供園・保育園の園児らの母親4471人を対象として調査を行っている。回収率は78%。

【参考文献】

- 大津由起雄・鳥飼玖美子 (2002) 『小学校でなぜ英語?—学校英語教育を考える』岩波ブックレット
 大津由起雄 (編) (2004) 『小学校での英語教育は必要か?』慶應義塾大学出版会
 影浦攻 (2000) 『小学校英語—66研究開発校の取り組み全情報』明治図書出版
 唐須教光 (2004) 「Who's afraid of teaching English to kids?」大津由起雄 (編) (2004) 『小学校での英語教育は必要か?』慶應義塾大学出版会 pp.81-111.
 金森強 (2003) 『小学校の英語教育—指導者に求められる理論と実践』教育出版
 東野裕子・高島英幸 (2003) 「英語活動から「小学校英語」教育へ—『小学校学習指導要領外国語 (英語) 科』をシミュレーションする—」『JASTEC 研究紀要』Vol. 22. pp. 87-100.
 富田祐一 (2004) 「国際理解教育の一環としての外国語会話肯定論—競争原理から共生原理へ」大津由起雄 (編) (2004) 『小学校での英語教育は必要か?』慶應義塾大学出版会 pp. 149-186.
 鳥飼玖美子 (2004) 「小学校英語教育—異文化コミュニケーションの視点から」大津由起雄 (編) (2004) 『小学校での英語教育は必要か?』慶應義塾大学出版会 pp. 187-220.
 直山木綿子 (2004) 「小学校への英語導入について」大津由起雄 (編) (2004) 『小学校での英語教育は必要か?』慶應義塾大学出版会 pp.221-244.
 中嶋洋一 (2000) 『学習集団をエンパワーする30の技』明治図書
 松川禮子 (1998) 『小学校に英語がやってきた—カリキュラムづくりへの提言』アプリコット
 松川禮子 (2003) 『小学校英語活動を創る』高陵社書店
 松川禮子 (2004a) 「小学校の英語教育に関する研究開発校の現状と課題」中央教育審議会・外国語専門部会資料
 松川禮子 (2004b) 「小学校英語活動の現在を考える」大津由起雄 (編) (2004) 『小学校での英語教育は必要か?』慶應義塾大学出版会 pp.17-44.
 文部省 (1998) 『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局
 Gass, S.M & Selinker, M. (2001) *Second Language Acquisition - An Introductory Course.* Lawrence Erlbaum.

【資料1】 小学校「外国語 (英語) 科」シラバス試案
 目標: 自分と身の回りの世界をやさしい英語で表現する

学年	指 導 目 標	参 考
低 学 年	○ 名前を言ってみよう カバンの中のもの/教室の中のもの/学校の中のもの/家の中のもの/町の中のもの ○ 自分を表現してみよう (1) 僕は太郎です/僕は6歳です/僕は小学生です/僕はお腹がすいています/僕は楽しい/僕たちは小学生です/僕たちは楽しい	類例: 果物, 野菜, スポーツ, 国名, 職業名など 20までの数 Are you...の文型も活用
	◆ まとめの活動 自己紹介をしてみよう (1)	
	○ 尋ねてみよう (1) wh-questions ○ 身の回りの世界を表現してみよう (1) これは僕のカバンです/これは僕たちの教室です/これは音楽室です/あれはお父さんの車です/あれはスーパーです/これらはお母さんのアルバムです/あれらは僕のマンガです	Is this...の文型も活用
	◆ まとめの活動 学校を案内してみよう	
	○ 尋ねてみよう (2) wh-questions	
	○ 自分を表現してみよう (2) 僕は歌っています/僕はテレビを見ています/僕たちは勉強しています/僕たちは英語を話しています ○ 尋ねてみよう (3) wh-questions	Are you singing? の文型も活用

中 学 年	○ 自分を表現してみよう (3) 僕は犬が好きです/僕は広島に住んでいます/僕は4人家族です/僕は日曜日に野球をします/僕は7時に起きます	Do you like dogs? の文型も活用
	◆ まとめの活動 自己紹介をしてみよう (2)	
	○ 尋ねてみよう (4) wh-questions ○ 身の回りの世界を表現してみよう 彼は僕の兄です/彼女は僕の先生です/彼らは僕の友達です/彼女たちは僕のクラスメートです	Is he your brother? の文型も活用
	◆ まとめの活動 家族や友達を紹介してみよう	
	○ 尋ねてみよう (5) wh-questions ○ 身の回りの世界を表現してみよう (3) 彼は音楽を聴いています/彼女は車を洗っています/彼らは先生を手伝っています/彼女たちは新聞を読んでいます	Is he listening to music? の文型も活用
	◆ まとめの活動 教室の様子を説明してみよう	
	○ 尋ねてみよう (6) wh-questions ○ 自分を表現してみよう (4) 僕はお寿司が食べたい/僕はマンガを読むのが好きだ/僕たちはサッカーをしたい/僕たちはゲームをするのが好きだ ○ 尋ねてみよう (7) wh-questions	Do you want to eat sushi? の文型も活用
	○ 自分を表現してみよう (5) 僕は泳ぐことができる/僕はピアノを弾くことができる/僕たちは上手に歌うことができる/僕たちは英語を話すことができる	Can you swim? の文型も活用
	◆ まとめの活動 自己紹介をしてみよう (3)	
	○ 尋ねてみよう (8) wh-questions ○ 身の回りのことを表現してみよう (4) 彼は速く走ることができる/彼女は車を運転することができる/彼らはカレーを作ることができる/彼女たちはサッカーをすることができる	Can he run fast? の文型も活用
◆ まとめの活動 海外の友達に自分や家族のことを紹介してみよう		
○ 自分を表現してみよう (6) 僕は昨日宮島へ行きました/僕は昨夜英語を勉強しました/僕たちは先週サッカーをしました/僕たちは今朝部屋を掃除しました	Did you go to Miyajima yesterday? の文型も活用	
◆ まとめの活動 自分の夏休みの出来事を表現してみよう		
○ 尋ねてみよう (9) wh-questions ○ 身の回りの世界を表現してみよう (5) 彼は先月東京へ行きました/彼女は去年アメリカに住んでいました/彼らは先月日本へ来ました/彼女たちは昨日山に登りました	Did he go to Tokyo last week? の文型も活用	
◆ まとめの活動 海外の友達に自分の学校や町を紹介してみよう		
○ 尋ねてみよう (10) wh-questions		